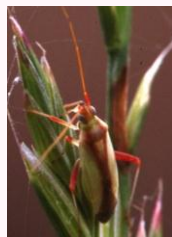


斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ）の効率的防除対策の確立

農業試験場

1 背景

高品質米生産を目指す鳥取県の水稲栽培において、斑点米混入によって等級落ちを引き起こす斑点米カメムシ類は、水稲の最重要害虫として位置づけられている。カメムシ類の防除対策は昭和50年代の試験結果に基づいて行われていたが、近年、カメムシ類の主要種が大きく変わり、当時未発生であったアカスジカスミカメが最重要種となった。そのため、アカスジカスミカメを主体においたカメムシ類対策の確立が要望されていた。



アカスジカスミカメ
 籾を吸って斑点米をつくる
 斑点米カメムシ類の1種



斑点米

- 玄米等級別の混入基準
- 1等:0.1%未満
 - 2等:0.3%未満
 - 3等:0.7%未満
- 少量混入で玄米等級低下

↓
 高品質米生産のためには、アカスジカスミカメの発生生態にあった適切な防除が必要！！

2 目的

アカスジカスミカメの水田における発生消長と斑点米の調査を行って防除適期を解明するとともに本種の要防除水準を設定し、斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ）の効率的防除対策を確立する。

3 内容

(1) 水田でのアカスジカスミカメの発生パターン

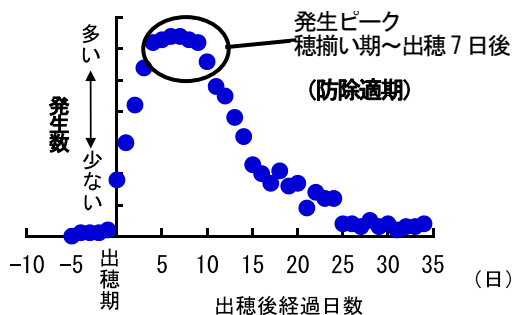
成虫は水稲の出穂に伴って水田へ侵入し、穂揃い期～出穂7日後頃に発生が最大となり、出穂20日後頃に終息する。発生の主体は成虫で、幼虫はほとんど発生しない。

(2) アカスジカスミカメの防除適期

斑点米率とすくい取り虫数の間で最も高い正の相関が認められる時期は、穂揃い期～出穂7日後である。一方、出穂期では相関がなく、出穂10～20日後では相関が低い。したがって、粉剤や水和剤を使用する場合の防除適期は、穂揃い期～出穂7日後である。

(3) アカスジカスミカメの要防除水準

穂揃い期～出穂7日後のすくい取り虫数と斑点米率との統計検定から、要防除水準は、50回振りすくい取り虫数 6頭と設定する。また、防除要否の判断時期は防除の直前（穂揃い期～出穂7日後）とする。なお、アカスジカスミカメと他の斑点米カメムシ類（ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、トゲシラホシカメムシ等）が混発するほ場では、他の斑点米カメムシ類を1.5頭に換算する。



アカスジカスミカメ成虫の発生パターン（水田）



すくい取り調査のようす
 直径36cm、柄の長さ90～100cmの捕虫網を使用。畦畔から10条分ほ場の中へ入り、前進しながらすくい取る場所が重複しないように、半円を描くように網をふる。

4 活用の成果と残された課題

現在も斑点米カメムシ類の多発生年が頻発しているが、本成果に基づいたカメムシ類防除が県下で行われており、斑点米被害はピーク時より減少している。また、改訂した要防除水準は、病害虫防除所等が行っているすくい取り調査結果の解析に広く利用されている。

今後の課題として、防除要否判断の調査法の改良があげられる。すくい取り調査は容易に行える方法であるが、調査者の労力的負担が大きいこと、雨天や強風時には調査出来ないこと等の問題点がある。これらを解決するため、現在、フェロモントラップを利用した斑点米カメムシ類の発生量調査法および防除要否判断法を中央農業総合研究センター等と共同で開発中である。